

費孝通著『郷土中国』の出版をめぐって

西澤 治彦

はじめに

費孝通著の『郷土中国』の訳書の増補改訂版の準備をしている中で、訳文の再検討以外にも、費孝通や当時の社会学や政治的状况などについてもいろいろと深掘りしていった。その過程で、『郷土中国』という書名がつけられるに至った詳しい事情と、『世紀評論』への寄稿と単行本化のより詳しい過程や、続く『郷土重建』の刊行の微妙なタイミング、そして緊迫の度合いを増す時局への対応を迫られる費孝通の心境などが垣間見えてきた。訳書の訳者解題に含めるには、詳細すぎる情報であるので、ここで別稿として公表しておきたい。

『郷土中国』の書名について

『郷土中国』の書名にも使われている中国語の「郷土」^{シヤントウ}には、①生まれ育った故郷、②田舎、地方（農村）という二つの意味がある。しかしこの二つは対立するものではなく、重なり合う関係でもある。従って、『郷土中国』という書名の「郷土」も、両義的で重層的なものであるが、本書の主題から判断すれば、②の田舎、農村（的な）、という意味が前面に押し出されていると言えよう。

費孝通が本書に『郷土中国』という書名を付けたのには、彼なりの意図があつてのことと思われる。雲南大学や清華大学での講義科目名は、「郷村社会学」であつた。ところが、『世紀評論』に連載した際のタイトルは「雑話郷土社会」となっており、単に農村を意味する「郷村」から、②の田舎、農村（的な）、という意味の「郷土」に変えている。その上で、単行本化に際して、その意味をもたせた「郷土」を「中国」と組み合わせることにより、郷土性の問題を国のレベルまで拡大しようとした。こうすることによって費は、佐々木衛も指摘しているように、中国民衆の基層にある生活と意識構造を一体として表現する概念を『郷土中国』の「郷土」に持たせたと考えられる（二〇〇三『費孝通——民族自省の社会学』）。つまり、「郷土」ということばに、新たに「中国社会の基層をなしている特徴的な構造」という概念を付与したのである。中国人にとって『郷土中国』^{シヤントウヨングオ}という書名が独特の響きを持つのは、このように拡大された概念に加えて、①の生まれ育った故郷、という意味も重なり合っているからである。

「郷土」のもつ両義性は、姉妹編である『郷土重建』についても当てはまる。こちらの「郷土」は、①の生まれ育った故郷、という意味が前面に押し出されており、我が郷土を重建するにはどうしたらいいか（「重建」は既存の物に重ねて作り直すというニュアンス）、というのが本書の主題となっている。と同時に、「農村的な中国」をいかに

重建していくか、という意味も含んでいるのである。

日本人研究者の間では『郷土中国』の名称で通っているのと、三部作の一つである『生育制度』の邦訳も原著のままであるのに合わせる意味もあるが、費のこうした意図を汲みとり、訳書としても原著の通り『郷土中国』とするのがふさわしい。

『郷土中国』の書名に関しては、閻明も二〇一六年に発表した『「差序格局」探源』の中で論じている。即ち、費の「郷土社会」という概念には、費と親交のあったロバート・レッドフィールド（一八九七—一九五八）が一九四七年に書いた“The Folk Society” (*American Journal of Sociology* 52-4) が一定の影響を与えていること、費自身が一九四八年九月にレッドフィールドへの書簡の中でこのことに言及し、自著の『郷土中国』を *Folk China* と英訳していることを紹介している。また、費が一九四五年に、張之毅との共著である『禄村農田』などを英語に編訳して出版した *Earthbound China* に対し、袁方が一九四七年に書評を書いているが（『益世報』「社会研究」第一期）、その見だしを「書評 郷土中国」とし、*Earthbound China* を「郷土中国」と漢訳していることを指摘している。この場合の「郷土」は「土地に縛られた」という意味であり、まさに費が『郷土中国』の「郷土」に持たせたのと同じ意味である。閻明は、費が袁方の書評を読んで『郷土中国』という書名にしたのかは定かではないが、中国伝統の基層社会の特性をこの情感溢れる「郷土中国」という語句で表現したのも、費の学問の風格ともいえる「創造的な転化」の為せる技であった、としている（『社会学研究』二〇一六年 五期）。

袁方の書評が掲載された『益世報』はカトリック教会が天津で発行した中国語の日刊紙で、ベルギー人神父によって一九一五年一〇月一日に第一号が刊行された。日中戦争期は一時、停刊を余儀なくされるも、昆明や重慶で続刊

された。一九四五年一二月に再び天津で刊行されたが、一九四九年一月一三日の一〇八四五号をもって終刊となった。「社会研究」欄は、一九四七年の八月八日号から開設され、毎週水曜日（後に木曜日に）掲載されるようになった。広く投稿を求め、連絡先は清華大学の社会学系が窓口となっていた。各界野の人士が寄稿した『益世報』は、『大公報』や上海で刊行された『申報』と並んで、近現代の中国に大きな影響を与えた新聞であった。

私も袁方の書評を取り寄せてみた。費孝通の *Earthbound China* に対する書評が掲載されたのは、「社会研究」欄の記念すべき第一期で、民国三十六（一九四七）年八月八日のことで、『益世報』の創刊から三三年目、終刊から二年前のことであった。「社会研究」欄は一面の半分ほどのスペースを使ったもので、巻頭記事は吳景超の「社会学的園地」で、発刊の趣旨が簡潔に語られ、続く記事は周荣徳の「論我国人口局的組織和業務」となっている。そして三つ目に、袁方の書評が掲載されているが、見出しは「郷土中国」となっており、その横に小文字で *Earthbound China*, by Hsiao-Tung Fei and Chih-I Ching, University of Chicago Press, 1945 と原著名が記されている。一見すると「郷土中国」が書名のようにもとれるが、よく見ると、評者が英語の書名を読者の目を引くように漢訳したことが理解できる。書評そのものは、限られた紙面の関係で内容紹介が主であるが、原著の刊行から二年を経たちょうどいいタイミングでの書評掲載となった。これが第一期に掲載されたということは、中国社会学界をあげて、この費の業績を世に知らしめたいという思いが伝わってくる。一九四七年八月というと、費はすでに北京に戻っていた。即ち、四六年暮れにイギリスの文化交流協会の招きに応じて渡英し、三ヶ月ほどの滞在を経て、翌四七年三月に帰国していた。もっとも、出発時に所属していた昆明の西南聯合大学はすでに解散していたので、北京の精華大学に戻り、そこで社会学を教えていた。潘光旦とも親しかった費であるから、費がこの記事を読んではないとは考えられない。こう考えると、闡明が推測はあながち間違っていないようだ。

Earthbound China に寄せた費の序文によると、『禄村農田』として結実する内陸部での農村調査は、費がイギリス留学を終えて一九三八年に帰国する際に、マリノフスキーが彼に与えた研究テーマであったことが記されている。この『禄田農田』をベースに編訳されたのが *Earthbound China* であったことを考えると、本書の生みの親はマリノフスキーということになる。マリノフスキーはその後も、費にさまざまなアドバイスを送ってくれたという。その多くは郵送の途中で失われてしまったが、*Earthbound China* というタイトルを本書のために提案してくれた手紙だけは受けとることが出来たという。ロンドン大学大学院の修了後も、マリノフスキーとの師弟関係は続いていた訳であるが、マリノフスキーは費孝通が帰国した翌一九三九年に渡米したまま、四二年に心臓発作で急死しているため、彼にとって費は博士課程で指導した最後の学生となった。

費が自著の『郷土中国』を自ら *Folk China* と英訳したというのは意外な感じを受けるが、『世紀評論』に連載した「雑話郷土社会」というタイトルは、確かに“The Folk Society”の影響があるかもしれない。その流れで『郷土中国』を *Folk China* と英訳したとも考えられる。いずれにせよ、「郷土社会」から『郷土中国』への展開は、確かに大きな飛躍であり、袁方の書評が一つの契機となった可能性は十分に考えられよう。レッドフィールドの影響から「雑話郷土社会」というタイトルがつけられ、「雑話郷土社会」の連想から *Folk China* という英訳が試みられ、その一方でマリノフスキーによって名付けられた *Earthbound China* に対する書評で袁方がこれを『郷土中国』と漢訳し、それを費が用いたという流れがあったとすると、『郷土中国』という書名の背後には、国境を超えた研究者間の幾重もの交流があったことになる。

その後、一九九二年になって『郷土中国』が Gary Hamilton & Wang Zheng によって英訳されたが、そのタイトルは *From the Soil: The Foundations of Chinese Society* となっている。「土」を入れたのは理解できるが、あま

りいいタイトルとは思えない。おそらく、*Earthbound China* という名タイトルが既に使われているため、他のタイトルを考えざるを得なかったであろう。このほか、『郷土中国』のうち、「差序各局」の章だけ、早くも一九七七年にリーディングスの中で抄訳がなされているが、この際、『郷土中国』は *Rural China* と英訳されている。^(注)ちなみに、アークツシュも一九八一年刊の *Fei Xiaotong and Sociology in Revolutionary China* の Bibliography の中で、『郷土中国』を *Rural China* と英訳している。これは一九七七年にリーディングスの中で抄訳された際の英訳を踏襲したようである。

最初は書名として名付けられた「郷土中国」であるが、その独特の響きと、費孝通によって付与された多くの含意とによって、民国期の書名としての固有名詞から、一九八〇年代以降の再評価の時代になると、半ば一般名詞化してきている。実際、『郷土中国』からインスピレーションを受け、「郷土」や「郷土中国」を書名に用いた書物も多く出版されるようになった。陳心思著の『走出郷土——對話費孝通』『郷土中国』二〇一七（三聯書店）などもそうした一冊である。また、閻明が二〇〇四年に出版した中国社会学史である『二門学科一與一個時代——社会学在中国』（清華大学出版社）を読むと、第七章に、書名を指す「」なしで、「郷土中国」とある。中国社会学史において「郷土中国」といえば、一〇〇パーセント、費孝通著の『郷土中国』を指すが、閻明がこの章で語っているのは、費孝通や彼の『郷土中国』そのものの内容ではなく、中国社会学史における燕京学派の位置づけである。ここでは、単なる一般名詞というよりも、燕京大学を拠点とした呉文藻—費孝通ラインの研究スタイル、あるいは研究成果の代名詞として使っているようである。その内容は詳細で有益であるが、『郷土中国』の書名は一度だけしか出てこず、最後は『郷土重建』の話に繋げてこの章を終えている。これはこれで一つの記述のスタイルではあるが、費孝通が『郷土中国』

で提起した「差序各局」や近代国家への道のりの議論は全くスルーしてしまっている。二〇〇四年であれば、費孝通は再評価されて久しく、社会学においても「差序各局」の問題は、中国人社会の人間関係を分析する枠組みとして、盛んに議論されている。この問題に触れていないのは、闡明の個人的な関心がなかったのか、あるいは何らかの政治的な配慮が働いたのかはよく分からないが、私には後者の可能性が高いように思えてならない。

最後に、費孝通のつけた *Earthbound China* に関連する書籍のタイトルでいうと、*Home Bound : Studies in East Asian Society : Papers Presented at the Symposium in Honor of the Eightieth Birthday of Professor Fei Xiaotong* が想起される。これは中根千枝と喬健によって、一九九〇年一二月に東京で開かれた費孝通の傘寿を祝って開かれたシンポジウムの論集のタイトルである。巻頭には費孝通の“The Study of Man in China – Personal Experience”（「人的研究在中国」）が収められている。序文にて明記されているわけではないが、この書名は *Earthbound China* を踏まえているものと思われる。*home bound* には、(1) 故国に向かう、(2) 「病氣・高齢などで」家や国から出られない、の意味がある。本書のタイトルである *home bound* は、(2) の意味を完全に消し去ってはいないかも知れないが、(1) の意味を拡大し、「郷土にしっかりと根を張った、自文化研究」という新たな意味合いが込められていると思う。まさに『郷土中国』を書いた費孝通の傘寿を記念するにふさわしいタイトルと言えよう。

『郷土中国』が単行本として出版されるまでの事情

『郷土中国』は一九四八年四月に上海の観察社から初版が出版されている。費孝通が若十三八歳の時のことであった。彼の代表作、そして民国期の中国社会学を代表する作品となった『郷土中国』であるが、全編が単行本として

書き下ろされたものではなく、費自身が「後記」にて言及しているように、南京で発行されていた『世紀評論』という雑誌に連載されたものをベースに、何篇かを加筆し、編集し直したものである。この事情を説明した「後記」の最後の段落をここに引用したい。

私は長い間、長い間、ずっとこれらの「郷村社会学」の科目で講義した材料を整理したいと考えていたが、筆をとろうとする度にまだ十分に煮詰まっていないと感じ、遅々として進まなかった。「イギリスから北京に戻っていた」昨年の夏休みに、張純明先生が私に『世紀評論』に長期に渡って原稿を書くように誘って下さった。ご厚意を辞退する訳にもいかず、ようやく今学期になって書き始めることにした。講義としては一篇を書き、書いては「南京まで」郵送し、届けば発表されるという具合で、合わせて十数篇の文章になった。儲安平先生が、これをまとめて「觀察叢書」の一冊に入れるよう、声をかけて下さったので、改めて編集し直すことにした。何篇かを新たに書き直し、また全体を通して修正を加えた。両氏の督促と励ましがなければ、本書を書き上げることはできなかったであろう。しかし督促には期限があったため、私としては多くの概念が成熟するのを待って発表することができなかったし、その中にはさらに考察されるべき部分が多く残されている。「従って」本書は定稿とは言えないし、また完成稿でもなく、私のひとつの試みを記録したものに過ぎないのである。

〔民国〕三十七（一九四八）年二月十四日 清華勝因院にて

この事実を知った私は、訳者として『世紀評論』の連載記事に当たると考え、何とか全連載を入手した。連載のタイトルは「雑話郷土社会」で、第一回の連載は「熟人裏長大的」と題して、第二卷第三期（民国三六年七月）に掲載された。連載は一回続き、最後の寄稿は「血縁和地縁」で、第三卷第十三期（民国三七年三月）であることが分かった。『世紀評論』（週刊）は国民党の高級官僚も務めた経済学者の何廉が一九四七年一月に南京で創刊した雑誌で、主編は張純明^{（注2）}、編集委員の中には潘光旦の名前もあった。出版元は世紀出版社で、第一卷第一期は、民国三六（一九四七）年一月四日に創刊され、民国三七（一九四八）年一〇月二日の第四卷第十四期で終刊となっている。僅か約二年間しか続かなかった雑誌であるが、その鋭い時事批評、民主の主導、大胆な言論などによって、たちまち社会の認知を受けることとなった雑誌である。

雑誌が創刊された民国三六（一九四七）という、一九四五年に日中戦争が終結し、中国国内は国民党と共産党との熾烈な内戦に突入していた時期であった。「発刊詞」には、内戦の進行と農村の疲弊、国民経済の崩壊、乱れた秩序と汚職が蔓延するという時代にあつて、しかも時間的な猶予のない中で、党派に囚われない自由主義と民主の立場から、権威や伝統に頼ることなく現実を直視し、現代化された新中国を共に建設していこうではないか、と創刊の意図が力強く訴えられている。実際、創刊号の最初の社論は「中国需要忠実有力の在野党」となっている。費孝通が張純明の勧めで「雑話郷土社会」の連載を始めることになったのはこのような雑誌であった。

この連載と単行本化の過程を子細に検討していく過程で、それまで見えていなかった様々なことが分かってきた。費孝通が単行本化の過程で、どのように内容を改編していったかは、訳書の「訳者解題」で詳しく述べているので、ここでは繰り返さない。本稿では、それよりも、執筆の日付に注目したい。というのも、「後記」で書かれていることをそのまま真に受けると、『世紀評論』の連載後に単行本化の話がもちあがったかのようにとれるが、連載記

事と「後記」の日付をよく見ると、そうではないからである。
 以下、『世紀評論』への連載が掲載された日付と、『郷土中国』および『郷土重建』の出版までを、年表にまとめ
 てみた。
 (注3)

『世紀評論』	『郷土中国』	『郷土重建』	時局
【一九四七年】 三月 (英国から帰国、北京の清華大学に戻る) 六月 六月七日第一卷第二四期「編輯後記」で費の連載を予告 七月 七月一九日第二卷第三期①「熟人裏長大的」(連載開始) 八月 八月二日第二卷第五期②「文字下郷」(暗に平民教育運動批判) 八月一六日第二卷第七期③「再論文字下郷」 九月 九月六日第二卷第一〇期④「所謂家庭中心説」 九月二〇日第二卷第二期⑤「差序的格局」			

一〇月 一〇月一八日第二卷第一六期 ⑥「論私」 十一月 十一月一日第二卷第一八期 ⑦「道德在私人間」 十一月二二日第二卷第二二期 ⑧「礼治秩序」 【一九四八年】 一月 一月三日第三卷第一期 ⑨「無訴」 一月二四日第三卷第四期 ⑩「無為政治」 二月 二月七日第三卷第六期 ⑪「長老統治」 二月二一日第三卷第八期 ⑫「大家庭還是小家族」	二月一四日『郷土中国』 「名実的分離」「從欲望到需要」 「後記」執筆 二月二八日『觀察』第四卷第一期 『郷土中国』の出版を予告		
--	---	--	--

三月	三月六日第三卷第十期			
	⑬「男女有別」			
	三月二十七日第三卷第十三期			
	⑭「血縁和地縁」(連載終了)			
四月		『郷土中国』 初版出版 (三千部印刷)		
六月		『郷土中国』 再版	六月一九日『郷土重建』 「後記」執筆	
七月		『郷土中国』 三版		
八月		『郷土中国』 四版	『郷土重建』 初版出版	八月一四日 晏陽初「開発民力建設郷村」 八月二八日 「評晏陽初『開発民力建設郷村』」(晏陽初を名指し批判)
九月			『郷土重建』 再版	【遼瀋戦役】 〓 一一月
一〇月	『世紀評論』 停刊			
十一月		『郷土中国』 五版		【淮海戦役】 〓 四九年一月 【平津戦役】 〓 四九年一月
十二月			『郷土重建』 三版	

【一九四九年】 一月 四月 一〇月	『郷土中国』六版	北京「解放」 『益世報』停刊 【渡江戦役】 南京「解放」 中華人民共和国建国
---	-----------------	---

『世紀評論』は一九四八年の一〇月まで刊行されたのに、費の連載がなぜ第三巻の第十三期（一九四八年三月二七日）で終わったのかはよく分からない。当初から一四回の連載の予定でなかったとすると、何か別の事情があったと考えられる。いずれにせよ、時局は緊迫した状態で、費としても「中国社会の郷土性」に関しては、ほぼ書きたいことを書いた、ということであろう。但し、連載としては、やや尻切れトンボの感がないでもない。そこで単行本化に際し、一部修正を加えた上で、新たに二篇と「後記」が加えられることとなった。当時の社会的な空気の中で、費としても社会学の理論問題から、最後は時事的な問題に収斂せざるを得なかったであろう。

年表にしてみても気がつくのは、最後の連載日が三月二七日なのに対し、単行本の「後記」の日付が二月一四日になっていることである。これは、二月に追加の二篇と「後記」を執筆する前の段階で、連載の最後の三回分の原稿を既書き終え、南京に郵送していたことを示している。つまり、連載の途中で単行本化の話が持ち上がり、費孝通は連載の終盤と単行本化を同時進行していたことになる。

こうした事情が分かると、『郷土中国』の最後の二篇が、それまでの議論とはやや異質なものになっていること

の謎も理解できる。この最後の二篇で費が述べているのは、それまで論じてきた郷土社会そのものの分析ではなく、その変動に関することである。社会構造の変動は人間が主体的に行なうものであること、原始社会や戦時などにおいて、これまで論じてきたものとは異なる「時勢的な権力」が発生するとし、ソビエト連邦の権力構造を解釈している。革命にも言及している点では、『郷土重建』に近い時事評論的な視点で書いているとも言える。英雄の出現、宣伝戦と反対者を押さえ込む思想統制など、それまでの社会学的な分析とは明らかにトーンが異なってくる。

第十四章となると、遠回しに述べているせいか、一読しただけでは費が何を言わんとしているのかが分かりにくい。「欲望から需要へ」という表題自体、郷土社会下における「欲望」から、計画経済下における「需要」への転換を意味しており、読み方によっては、社会主義政権の誕生を予見していたともとれる。その一方で、社会学の概念である「機能」を自覚することによって、我々は理性の時代へと転換できるとし、「時勢的な権力」を「知識に基づく権力」と言い換えるなど、最後に時事的な問題から再び社会学一般の問題に回帰して本篇を終えており、研究者としての自制も働かせている。

「後記」は、時事的な問題からは遠ざかり、社会学の歴史の中に自らの研究の歩みと、『郷土中国』を位置づける内容となっている。中段だけを見ると、社会学史の概略になっており、本書の英訳本では、別段、新たな知見ではないと見なされたのか、省略されているほどである。しかしながら、この中段は、『郷土中国』を学術書として世に出すためには不可欠なものであった。「後記」としてはやや長く、異色な内容であるが、社会学者としての費孝通が一番、訴えたかったものが最後に吐露されていると考えるべきであろう。

一九四六年に中国民主同盟に加入した時点で、費は国民党との距離を取る立場に立ったが、同年七月の「李聞惨案」以降は、国民党のもつ限界に対する諦念や失望の念を抱いたことであろう。だが、一九四七年三月に北京の清華大

学に戻った費が、『世紀評論』に寄稿を始めた四七年七月の段階では、まだ第三の道の可能性を模索していたものと思われる。第二章「文字下郷」では、暗に平民教育運動を批判しているものの、晏陽初を名指すことは控えていた。しかしながら、その後、追加の二篇を書き終えたと思われる四八年二月の時点までに、費は共産党政権に希望を托すようになったものと思われる。

実際、『郷土中国』の初版が出版された一九四八年四月に、費孝通は、河北省平山県西柏坡村にて、民主同盟の一員として中国共産党中央と政治交渉に参加し、毛沢東、周恩来らと面談している。この交渉がいつアレンジされたのかは分らないが、『郷土中国』の出版は、追加した二篇もあつて、別段、大きな問題とはならなかったようである。『郷土中国』は好評で、六月に再版が出され、その後も、七月、八月、十一月と版を重ね、一九四九年一月の第六版まで増印が続いた。今から振り返ると、この二篇のおかげで、『郷土中国』は革命直後も政治問題化することを免れ、且つ、改革以降も再評価されることが可能となったとも言える。

むしろ、問題になるとしたら、党中央との面談から二ヶ月後の六月一九日に『郷土重建』の跋にあたる「對於各家批評的總答復（後記）」を執筆していることである（出版はその二ヶ月後の八月^{（注）}）。というのも、『郷土重建』は、流血を伴うことのない革命への道を模索し、憲法と民主を主張した内容となっており、共産党政権の目指すものは、微妙に立場が異なるからである。どうやら費の心の内はまだ揺れていたのかもしれない。このためか、（後記）といつても、後記らしい内容は、最初と最後に少しあるだけで、中身はそれまで公表してきた論考に対する読者からの反論に答えることが主眼となっている。費としては、「對於各家批評的總答復^{（注）}」を書き、その後ろに（後記）とつけただけのようである。『郷土中国』の出版は觀察社の儲安平^{（注）}による強い働きかけがあつたが、『郷土重建』の場合はどちら側の要望であつたのかはよく分らない。（後記）には、大公報への投稿の機会や既発表のものをま

とめて観察社から出版することを許してくれた王芸生^{わうげんせい(注7)}への謝辞があるが、儲安平の名前や観察社に対する謝辞はない。

だが、それから僅か二ヶ月後の八月二八日になると、費は共産党政権への支持を鮮明に打ち出す。晏陽初に対する厳しい批判文章となった「評晏陽初『開發民力建設鄉村』」^(注7)がそれである。費は晏の、中国農民が苦境に置かれていること、封建的な伝統の圧迫と外来の強権の侮りを受けていること、広大な農村部の民力を開發する必要性などについては賛同するものの、中国農村問題に対する分析やその対処法に対しては異議を唱えている。批判点の一つは、晏の農民観や教育観に向けられる。晏は一貫して、中国農民には「愚、貧、弱、私」の四大病があるとしているが、平民教育の考えは、キリスト教の伝教の如く、これらの四大病を悪と捉え、それを正すという姿勢であると批判している。農民には自覚も、判断力も理性もあるとし、農民は晏の作った識字のテキストである「千字課」を学ぶことによって自覚を得るのではなく、自覚の後に初めて識字の必要性を感じるのであるとしている。その上で、晏の農村工作は彼なりの貢献をなした⁷が、過去三〇年の歴史が示しているのは、定県における晏の路線では決して中国の農村問題を解決できない、と論断している。晏は私人の立場で社会福祉に従事したが、今や彼の方法は政府の農村政策を代表するものとなっており、その意味での責任が問われるとしている。論文の後半では、地租の問題を解決するには土地制度の改革が不可欠で、晏の平和路線ではこれが出来ないこと、そしてこれを断行しようとしているのが共産党であるとし、晏の事業を含め、アメリカが支援する「復興農村」はこれに對抗するものであるとしている。さらには晏は中国農民の革命の力量を過小評価しており、この力量は決して識字からくるものではなく、何とかして生き延びようとする本能から生まれるものである、としている。

費が批判している晏陽初の「開發民力建設鄉村」(『大公報』一九四八年八月一四日)を読むと、晏はこの文章の

中では、「知識、生産、健康、組織」、あるいは「識字教育、鄉村衛生、農業推广、經濟合作」には言及しているが、「愚、貧、弱、私」という語句は使っていない。おそらく、費はこの文章を読む以前から、晏陽初の鄉村建設には関心をよせ、一九三三年七月に書かれた「中華平民教育促進会定県工作大概」^(注8)を読み、「愚、貧、弱、私」という語句を晏陽初が使っていることを知ったものと思われる。これを踏まえて、費の「評晏陽初『開發民力建設鄉村』」を読み返すと、費が批判したいのは、文章の導入として書かれた晏の中国農村に対する問題意識ではなく、晏がアメリカの財政的な支援を受けるようになったことに向けられているようにとれる。国共内戦期に入ってから、晏陽初は、重慶周辺での平民教育事業を継続すべく、渡米してアメリカの財政的な支援をとりつける。この段階に至って、平民教育運動は中国の共產化を防ぐための装置としての役割を担うようになった。費のこの文章は、一九四八年八月二八日に書かれており、晏陽初の寄稿に即座に反応したものとなっている。これには、このタイミングで『郷土重建』が出版の運びとなったことも関係しているかも知れない。

九月になると時局はますます緊迫し、国共内戦の三大戦役の一つである「遼瀋戦役」が始まる。ところが、同じ時期、『郷土重建』の再版が出る。一〇月には南京の『世紀評論』も停刊となり、一二月には「平津戦役」が始まる。意外なことに、同月『郷土重建』の三版が出る。おそらく、これは費孝通にとってあまり喜ばしいことではなかったと思われる。

その後、晏陽初は中華人民共和国成立の翌一九五〇年にアメリカに逃れ、費は中国に残って国家建設に身を投じる。一九四九年になると、自ら積極的に思想改造に取り組んだ費であるが、その後の人生は必ずしも彼の望む方向へとは進まなかった。反右派闘争で右派とされて以降、文革でも闘争にかけられ、波乱の人生を送ることになる。これも歴史の巡り合わせというしかない。

『郷土中国』および『郷土重建』は小冊子とはいえ、脱稿から出版までに最低でも二ヶ月はかかった。この二ヶ月間という長さは、当時にあつては時局が大きく動くのに十分過ぎる時間であつた。また、このタイムラグは、費孝通が居を構えていた北京と、世紀出版社のあつた南京や観察社のあつた上海との地理的な距離も大きく関係している。内戦の趨勢は北方から南方へと推移していったからである。『郷土重建』は、その内容からして、あと二ヶ月遅ければ世に出ることがなかった可能性が高い。一方の『郷土中国』は、社会学的な研究書であるが、『郷土重建』同様、時間的な猶予のない緊迫した状況の中での出版であつた。逆に言う、観察社の儲安平によつて、たとえ拙速ではあつても、何とか冊子として出版にこぎつけたことにより、両書は日の目を見ることができ、今日まで伝わる書物になったとも言える。そしてその背後には、費孝通に『世紀評論』への寄稿を勧めた張純明と、『大公報』への寄稿を勧めた王芸生の存在があつた。

民国期の三部作のうち、改革以降、最初に再評価され、重刊にこぎ着けたのは『生育制度』で、一九八一年のことであつた。続いて、一九八四年になり『郷土中国』が重刊されるが、『郷土重建』が重刊されたのは一九九九年と一番遅かつた。『郷土重建』は内容的に問題が全くない訳でもないが、それでも再評価されたのは、この中で展開されている議論が、復権してからの費孝通が提唱した鄉村工業の推進と合致する部分があつたからと推測される。費孝通は晩年、いくつもの研究回顧録を書いているが、民国期の研究の中では、『生育制度』に対しては多くを語っているが、『郷土中国』と『郷土重建』に対したはあまり多くを語っていない。とりわけ、一九九三年一〇月に蘇州で行なわれたシンポジウム「現代化與中国文化」における講演の原稿である「個人・群体・社会——一生物学歷程的自我思考^(注9)」では、一九四七年刊の『生育制度』をもつて自分の学術生活の前半生を締めくくるものと位置づけている。さらに、イギリス訪問から帰国した一九四七年から四九年までの時期は、著述に関して言えば收穫期であつ

だが、書いたものは主に時事評論で、振り返ってみると、学術思想の面では新たな発展もなかったとまで書いている。これが『郷土重建』を指しているのならまだしも、『郷土中国』を含んでいるとしたら、多少の謙遜があるにしても、意外な気がする。と言うのも、費自身が重刊に際して書いた「序言」にて垣間見せている心境とは、いささか異なるからである。

こうした事情を踏まえた上で、改めて『郷土中国』の「後記」を読み返すと、費孝通が慎重に言葉を選んでいるのが分かる。例えば、「後記」の導入部分であるが、費が一九八四年に書いた「重刊の序言」や、晩年に書いた研究の回顧録と読み比べると、帰国直後のことや、雲南大学内に附設された研究室の設立の経緯などがぼかして書かれており、どこか配慮の跡が感じられる。このため、『郷土中国』には、恩師であり、就職や調査拠点の開設でも世話になった呉文藻（一九四六年に国民党中国駐日代表团として来日）の名前が出てこない。西南聯合大学（国民政府による国立大学）の名も、「重刊の序言」で初めて登場する。

また、先に引用した「後記」の最後の段落も、張純明や儲安平の名前を挙げて『世紀評論』への連載や単行本化に対する謝意を表しているのは、どちらも自分から申し出たのではなく、依頼を受けて辞退できなかった、という「釈明」のようにとれなくもない。真相は分からぬが、今となつては、費孝通に限らず、革命前後の知識人が置かれた複雑で容易ならぬ立場と、心理的な苦悩をおもんばかるのみである。

注

- (1) Chinese Social Structure and its Values [From Fei Hsiao-tung, *Rural China*, 1948] in J. Mason Gentzler ed. 1977 *Chunging*

China: Readings in the history of China from the Opium war to the Present, pp. 210-214, Praeger Publishers

- (2) 張純明（一九〇二—一九八四）は、河南省洛寧出身。二二歳の時に公費でアメリカに留学、社会政治学を学び、イェール大学で政治学の博士号を取得。欧州各国を巡り、西洋の政府や政党、憲法などを比較研究した。帰国後は南開大学文学院教授、院長兼政治系主任、国民政府行政院高級秘書、河南省政府委員、立法委員等の職を歴任した。主要著作に『中国循吏研究』、『清代的幕制』、『考評桓寬塩鉄論』などがあるが、中でも一九四〇年に商務院書館から刊行された『中国政治二千年』は代表作とされる。一九四七年に創刊された雑誌『世紀評論』の主編を務めた。

- (3) なお、『郷土中国』の出版事情に関しては、瞿見が二〇二〇年に「帳前猶憶護燈人—費孝通《郷土中国》出版考」『中華読書報』（二〇二〇年六月三日一四版）という一文を書いていることを、川瀬由高氏からご教示頂いた。本論考は、『郷土中国』の出版が、「重刊の序言」で書かれている一九四七年ではなく、一九四八年であるということを実証したものであるが、その過程で、『世紀評論』の連載と、単行本化との間にずれが生じていることへの指摘がなされているほか、『世紀評論』誌上における費の連載の予告、雑誌『観察』誌上における『郷土中国』の出版予告、および『郷土中国』の増印に関する情報が含まれている。連載や出版の予告記事は筆者も知らなかった情報であり、年表作成において活用させて頂いた。

- (4) 内蒙古人民出版社の『費孝通全集』では、『郷土重建』は一九四七年に刊行された文章を集めた第五巻に納められている。その上で「対各家批評的総答復（後記）」の日付を一九四七年四月二三日としているが、これは民国三十七（一九四八）年六月十九日の誤り。

- (5) 儲安平（一九〇九—一九六六？）江蘇省宜興出身。名望家に生まれ、一九三二年に上海の光華大学を卒業後、南京にて『中央日報』副刊の編輯に携わる。一九三六年から二年間、イギリスに留学し、ロンドン大学（LSE）に学ぶ。日中戦争期、中国にリベラリズムを持ち帰り、その普及に尽力した。復旦大学教授のほか、『中央日報』の編輯者などを歴任し、重慶にて雑誌『客観』を刊行する。その後、国共内戦期の一九四六年、上海にて『観察』半月刊を創刊、社長および主編を務めた。『観察』は刊行後、直ちに民国期のリベラリズムを代表する雑誌となり、二年間の間に延べ八〇人ほどの自由主義的な知識人が論陣を張った。儲安平と費孝通とは同年代であるだけでなく、同郷、ロンドン大学の同窓の誼もあって、親しい関係にあった。『観察』が創刊されてからは、費孝通は運営の助手役を務める旁ら、自身も多くの評論を寄稿している。『観察』は、当時政権を担っていた国民党の憲政構想に対しても、共産党が提示する新民主主義に基づく連合政府構造に対しても批判的で、「第三の道」を模索する場となり、民主運動の旗手となった。しかし、国民政府に対する厳しい批判のせいで、一九四八年、蒋介石の命によって雑誌は停刊処分となり、社員も逮捕された（『観察事件』）。

中華人民共和国成立後、共産党政権は『観察』の復刊を認めるも、一九五〇年に終刊となった。儲安平はその後、新華書店の副

総経理、中国民主同盟の機関誌であった『光明日報』の総編集長などを歴任。一九五四年には第一届全国人大代表に選ばれている。一九五七年、「百花齊放、百家争鳴」運動を受けて、「向毛主席、周總理提些意見」(党が国家を指導すること、党が天下を取ることは違うという主張をしたため、通称「党天下」と呼ばれる)の一文を書くが、毛沢東はこれに激怒、続く反右派運動で儲安平は典型的な右派とされ、打倒の対象となった。家族や関係者なども受難し、文革中の一九六六年、残酷な迫害を受け、行方不明に。殺害されたとも自殺したとも言われている。一九七八年以降、五〇万人以上の「右派」が名誉回復(平反)されたが、儲安平は、章伯鈞(中国民主同盟の創始者、『光明日報』社長)らと共に、依然として中央一級の「五大右派」の一人とされている。

(6) 王芸生(一九〇一—一九八〇)は、中国の著名な言論人であり、日本研究の専門家としても知られる。光緒二十七年に福建省永安県に生まれ、天津在任時代から『益世報』に寄稿、『商報』の編集者を経て、一九二九年に『大公報』の張季鸞に招かれ、一九三五年には編集主任になる。三十七年には日本の上海占領によって停刊に追い込まれたため、三八年、漢口版の主任に転じ、重慶版の編集にも携わる。四一年、張季鸞の逝去にともない総編集を引き継ぐ。

在任中、『大公報』の「明耻教戦」という編集方針に基づき、「六十年来中国與日本」の執筆の命を受け、関連資料を渉獵し、一九三二年一月から『大公報』紙上で連載を開始する。二年間続いた連載記事を一九三四年になつて、『六十年来中国與日本』(全七卷)として出版。これが彼の代表作となった。一九四七年、総編集者の身分で訪日記者団に加わり、降伏後の日本を視察、帰国後に「日本半月」など一二篇の文章を残している。内戦に反対していたが、内戦勃発後は、「質中共」「可耻的長春之戦」などを執筆、『新華日報』の陸定一との論戦を巻き起こした。

中華人民共和国成立後、知識人の思想改造運動に参加、中国共産党に加入し、大公報社の社長に留まる。反右派闘争の際には、毛沢東の介入により右派に認定されずに済んだが、以降、社務につくことはなく、執筆活動に専念した。一九五六年、第二回原水爆禁止世界大会に中国代表として訪日し、帰国後『大公報』に日本紀行を連載。一九六五年には人民政治協商会議常務委員に選ばれる。翌六六年、文革の発動により、家族も含めて厳しい闘争にかけられる。『大公報』北京版も停刊を余儀なくされる。名誉回復後の一九七三年には中日友好協会副会長に、七五年には全国人民代表大会主席団員に、七九年には人民政治協商会議常務委員に再選された。翌八〇年、逝去。

(7) 王東生・王占英・王繼雄責任編集二〇一〇『費孝通全集』第六卷 所収 内蒙古人民出版社

(8) 宋恩榮主編二〇一三『晏陽初全集』第二卷 天津教育出版社

(9) 王東生・王占英・王繼雄責任編集二〇一〇『費孝通全集』第一四卷 所収 内蒙古人民出版社

